
IS ～ブリュンヒルデ攻略戦～

素敵紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（ブリュンヒルデ攻略戦）

【Nコード】

N2477X

【作者名】

素敵紳士

【あらすじ】

一度、死を迎えた男は第二の人生をスタートさせた。その世界はインフィニットストラトス。転生オリ主がブリュンヒルデを攻略するお話です。 知識は原作？、漫画？、アニメ、ほかの素晴らしいIS二次小説から成り立ちます。原作＋オリ話で展開していきます。よほどのことがないかぎり更新は週1回。もしかしたら毎日更新する日もあるかもしれませんがww

1st・Ready(前書き)

やほゝ 私が天才の束さんだよ！

というわけで、とりあえずスタート。

1st・Ready

世界で有数の軍事力を持つ国、アメリカ合衆国。

この国に俺は生まれた。いや、生まれることは決まっていた。

なぜなら、そう…俺は『転生者』だ。だが、『継承者』と言った方が正解だろう。

前世の記憶を全て引き継いでいるわけではなく、前世で学んだ知識（教科書、漫画、小説、その他雑学などを含む）を引き継いでいるのであって、人間関係については一切の記憶が無い。両親はもちろん、友人や知り合い、恋人は元々知らないが…（…メ）

だから、言うなれば生前の俺の『記憶』と『自我』を持ったアメリカ人ということだ。

俺が転生するにあたって起こった現象は割愛させていただこう。

あまりにもテンプレすぎてつまらないからだ。

まあ、お決まりの『チート能力』というものは俺が死んだことで助かった生物の数ということだった。俺が死んで助かったのはもうすぐ寿命の老人1人だったから『能力付加』は1つ。そこで俺が頼んだのは『能力』ではなく『希望』だ。ようは俺が生まれる年代を俺が決めることだ。

俺が生きる年代は、中学〜高校時代に『IS』が表舞台に出る時

代。つまり、白騎士の搭乗者と同じ年になるように操作してもらうことだ。

え、欲がない？

最初から『チート』よりも、生きていく過程で得る努力による『チート』の方が楽しいと思わないか？

『記憶』という基礎知識がある分、他人よりアドヴァンテージがあると考えられるだろう。

というわけで見た目は子供、中身は大人…その名は、エルレインⅡアルヴアルス。外見年齢8歳（中身は20歳）のただのハッカーだ。アメリカ人の父にロシア人の母、両親共にどっかの研究員であったため機材等は家に揃っていた。前世でハッキング技術は少しあったため、腕を磨いたのだ。

…容姿を知りたいのか？

身長：150cm、髪形は短髪、髪色は深紅色、茶眼の残念ながら女顔ではない。俺はこの先、ワイルド系でいこうか、クール系でいこうか迷っているところだ。まだまだ少年だからきつと変わるだろう…。

ちなみに学校にはテストと行事のときしか出席していない。算数とかするくらいなら、プログラミング技術でも勉強するよ。今後のためにね！

さて、今日も未来のために修行するかね。最近ハマっているの

はキックボクシングだ。足技ってカッコイイよな!!

2nd・Start（前書き）

wikipedia先生を見ながらの書き書き！

誤字修正しました。

2nd・Start

おっす！俺はエルレイン＝アルヴァルス、エルと呼んでくれ。

いやー意外と月日が立つのは早いと思わないか？

前回ではまだ8歳だったのに、気付いたらもう14歳だぜ？つまり6年後だ！！

おっと！詳しいことは聞かないでくれ…。色々あるんだよ…

6年の歳月でコンピューター関連技術（ハッキング、プログラミングなど）を習得し、キックボクシング、カポエイラ、空手を一通り習得した。だが、こんなことばかりしていたせいか友人が1人もいない…。

まあ友人の少なさはこの先なんとかなるとして…、なんとかなるのか？

それはそれとして…ついこの間、テレビを見ていた時だった。

それまで見ていた番組が一斉に切り替わった。いわゆる『速報』

ってやつだ。

その内容はまあ予想範囲内といえば範囲内だが、実際に現実^{リアル}で起こるとおもわずそれを凝視していた。

アメリカ…いや、全世界の軍事基地がハッキングされそこから一斉に総数2341発のミサイルが日本の首都『東京』があるであろう場所へ向けて発射された。

そう、『白騎士事件』だ。

この事件がきっかけとなり世界が動きだすのだが、俺は思わずリアルタイムで行われている1体のIS『白騎士』に目を奪われていた。

どこかの男の言葉を借りるならば…「これはまさしく…愛だ!」
だww

もちろんこれを見ている全世界の人間が目を奪われているであろう…ミサイルを無傷で撃墜する白い騎士の性能に。

だが、俺は違う。

白騎士の性能もそうだが、それをつかいこなす『操縦者』にだ。

俺も前世で原作を読んだことがあったが、もう目から離れはしないだろう。それくらい凄かった…

機体の性能もあるだろうが、そこらの少女が乗ったとしてもそこまで操れないだろう。

世界にとって運命が狂いだした事件だが、俺の運命も狂いだした。

俺はいつしかその操縦者『織斑千冬』に惚れていた…。

それがあつた日から俺は考えた。

これからのことを。

普通に過ごせば、おそらく普通に俺もISに関わることは予想できる。じゃなきゃこの世界に『俺』が存在する意味がない。

だが、それでは『織斑千冬』には到底近づけないだろう。

そこでまずは、世界中が必死になって行っているIS生みの親『篠ノ之束』へのコンタクトをとることにした。

まず、並みの交渉術では彼女の興味を惹くことはできないであろう。

そこで俺は、交渉のためのあるものを制作中だ。

『白騎士事件』で各国が得たデータをコピーするためにハッキングし、そのデータを研究して俺なりのISデータを作成する。コア以外なら多少の時間と手間で済んだが、やはりコアとなる部分の基礎理論を組み立てるのは困難だった。やはりコアは篠ノ之束しか作

れないのだろう…。

とりあえず、コア以外のコアフレーム、装甲、武装、宇宙運用における基礎理論を1つのデータとして圧縮ファイル作成した。

正直、これだけで彼女が興味を持つかは微妙だが『織斑千冬』に近づくことには俺の物語は始まらない。

技術を上げるのはそのあとで考えることにしよう。

そしてとりあえずだが準備は整った。

あとは適当に『篠ノ之束』と接触しようとしている国のネットワークに侵入にて、天災との電脳戦の開始といくだけだ。

とりあえず、今日はここまでにして明日のために十分な睡眠をすることにした。

3rd・Invasion

「フハハハハッ！！弱い！弱すぎるぞおお、篠ノ之束ええええええええええ！！」

…おっと、失礼。

篠ノ之束が世界中を驚かせたハッキング技術を持っているらしいから、偶然見つけたロシア政府経由で初めから全力で挑んだのだが…ものの数分でロシア政府は撃沈、天災様も既に我が手のひらの上だった。

既にチートクラスのハッキング技術を持っているなんてお兄さんはビックリだ

とりあえず、天災（束嬢）とのくだらない攻防戦を終了して、音声通信を繋げた。

「とりあえず、ハロー。篠ノ之束嬢であってるかな？」

どうだ？流暢な日本語だろおい？猛勉強しましたよ、3ヶ月くらいだけど…

「……………」

返事がない、ただの屍のようだ（笑

これは参ったね…。相手は言葉のキャッチボールというものが出

来ないらしいね。まあ、分かっていたが。

仕方がない、例の機体データ（自作ウイルス付き♪）をプレゼントしよう。ちなみに、日本国では『貢ぐ』と言うらしい。

それから数十秒だ経ち、おそらく詳細データを開こうとしたんだろ？が…パスワード設定してあるんだよね〜。正しいP a s sで開示、誤ったP a s sでウイルス攻撃が始まるのは内緒♪

すると、相手から通信が入った。

「ねえ、君は誰かな？」

おお！この反応は彼女の興味を引いたと思っていいよな？

「本当なら君から名乗るのが礼儀だと記憶しているけど、君の名前なんて誰もが知っているからしかたがないよね〜。俺のことは是非、『アルくん』と呼んでくれ。」

フルネームなんて簡単に教えない。相手の完全な信頼を得るまでは…

「じゃあ『あるん』、らぶりーな束さんはパスワードが分からなくて困ってしまったよ！」

あれ？もう愛称を通り越した名前が付いちゃってるんだがww

「じゃあ俺の願いを聞いてくれるかな？ああもちろん『IS』でも『コア』でもないよ？そんなもの男である俺には今のところ関係ないからね。とりあえず、3つの願いを聞いて欲しいなー？」

そう、俺の目的はただ1つ。だが、突然合わせろなんて言えません。それじゃあただの出会い厨じゃないか！

「あるんのお願ひならなんでも聞いちゃうよ！」

なんだコイツ…。逆に怪しくね？普通、ハッキングされた相手のことなんて簡単に信じれるか？

「ごめん、忘れてたよ。バカと天才は紙一重だとねww

「じゃあ早速1つ目だけど、今度君のラボに案内してくれ。そこで、パスワードと2つ目を言うから。それと、無理矢理パスワード開けようとしてない方がいいよ？ウイルスくんが動きだすから。」

誤解のために言っておく。別に俺は「君の家に行きたい」という意味で言っただけじゃないぞ？篠ノ之束は踏み台である。そう、彼女に近づくのはただそれだけだ。

「そ、そこで束さんを襲うつもり！あるんは大胆だねえ／／／」

……。もうコイツ嫌だ。誰かなんとかしてくれ

「と、とりあえず日本に着いたら連絡するから待っている。」

ふう…。とりあえず言おう、ナニモナカッタ！！

無理矢理回線を切った俺は、荷物を纏める。もちろん日本へ向かうためだ。

ハードディスクとUSBメモリを大量にスーツケースに詰め、ノートPCだけを持ちだす。

「待っている、日本！待っている、俺の嫁『織斑千冬』！！」

そう叫んだ場所は、とある空港のロビーであつたのは気にしないんだから／／／／

4th・Missing Hacker（前書き）

約3週間ぶりでごめんなさい。うち1週間はシンガポールにいました。

楽しかったです。お詫びとしてはなんですがいつもより若干長め。

誤字とかでもいいので感想お待ちしてます。

4th・Missing Hacker

俺は今、ものすごく困っている。

長い空の旅を終え、無事Japanに着いたのは3時間前のこと…。

空港を出た俺はタクシーに乗って、束のそこに向かおうとしたんだ。だが、タクシーのおっさん…俺が外国人だからってドアを開かないとはどうかと思うぞ？

仕方がなく、徒歩移動。

「…道が、道が分からない…だと…!？」

そう、地図はある。地図はあるのに絶賛迷子中だ

まあ、誰だって得意不得意はある。学校にあまり行かなかったのがまずかったか？

んで、今に至るわけだ。

近くにあった公園のブランコに乗りながら考える…。

良い案が思い浮かばない…と、思った時だ。

俯いてため息を吐いた俺の前に人影が現れた。

これはチャンスと思い、頭を上げた先には…小学生くらいの男女が2人いた。黒髪の少年と同じく黒髪でポニーテールの少女、肩には竹刀がある。

正直、迷った…子供に道を聞くのもどうかとね。俺もまだ子供だがww

「は、はろー？」

少年の方が話かけてきた。カタコトの英語なのがまたおもしろい。

おもしろいが、今は我慢しよう。

「大丈夫さ、日本語はしゃべれるよ。」

…そんなに外国人が日本語を話したら驚くかね。少年達との距離が若干だが開いたぞ？

「少し傷ついたけど、ちょっと助けてくれないかな？ここに行きたいんだけど…」

地図を渡して行き方を聞く。

「ああ、それなら…」

ご丁寧に現在地と目的地をマーカーで繋いで貰った。この子達はなんてやさしいんだ。だが、なぜ！なぜ少女の方は機嫌が悪い！と

りあえず、お礼としてこのCandyをあげよう。

お礼の品が気に入ったのか、少女の眉間から皺は消えた。

「君達、助かったよ。縁があつたらまた会おう!」

「ああ!じゃーな」

さて、別れは済んだ。いざ、目的の地へ!!

ふう、着いたぜ…。

目の前にある門には『篠ノ之神社』と書かれている。

中に入るため、糞長い階段に足をかけたときだった。

「はろはろーあるるん！あるるん！私が天才の束さんだよ　だよ
」

うさみみ・（ウサギの耳）をつけた女が空から降ってきた。

こいつがあ的女性限定パスワードスーツ『IS』を開発した天災『
篠ノ之束』か…。

うさんくさい自己紹介だが、声は画面越しの会話と同じだから本人なのだろう。

「やあ、俺が自称天災ハッカーのアル様だ。早速だがラボに案内
してくれないか？」

「あるるん！こつちだよ　早く早く！束さんはパスワードが気になるよ！」

そんなにあのデータが気になるのか…。とりあえず、ついていこ
うか。

「ここが！束さんの秘密基地だよ」

地下に案内され見たのは、機材とガラクタに囲まれた一室。

そして、奥に鎮座していたのは純白の鎧――

「これが『白騎士』か……」

その傍に近づきそつと触れる。

「おかしい、なぜ起動しない。」

もう一度触れる。

だが何も起きない。

なぜだ、俺も使えるのではないのか？

俺は『継承者』であるが、一応『神』という存在にもあっている。
テンプレ通り、俺も乗れるの思っていたが……考えが甘かったか……。

「ねえあるん！！はやく教えてよ！！」

いいかげん束がうるさい。ネガティブモードになっている頭を切

り替える、今は今に集中しよう。

「ああ、パスワードは白騎士こと『織斑千冬』だ。」

そう、白騎士であり俺の嫁の『織斑千冬』がパスワード。

「ねえ、——なんで白騎士のパイロットがちーちゃんだと分かったの？」

声のトーンがいきなり下がった束はそう言った。

現在、白騎士の正体は公開されていない。知るのは篠ノ之束、ただ1人。

俺への好奇心がいつきに不信感に変わったな…。

「簡単なこと、俺はハッカーだ。ちょっと調べれば分かる。各国との交渉を盗み聞きしていたが、篠ノ之束は他人に興味がまるでない。では、そんなやつが知らないやつに自身の最高傑作を預けるのか…？否、そんな訳がない。現在の篠ノ之束の交友関係は少ない。織斑千冬、織斑一夏、篠ノ之箒この3人のみがお前の友人だ。そして織斑千冬とお前以外はまだ幼い。ほら、答えはもう出た。それに織斑千冬は剣道、古武術に精通している。『白騎士』の装備はブレードと荷電粒子砲のみというのも当てはまるな。」

「君は——何者かな？」

「君が開発の『天災』なら、俺は侵入の『天災』だ。」

そう、俺は篠ノ之束をも超えるハッカー。自称だが、世界が翻弄

される篠ノ之束を簡単に侵した俺はまさに『天災』と自称してもいいだろう。

「というわけで、これが君が見たかったデータだよ。さすがの俺でもコア部は無理だった、まあ君も『天災』なのだから当然と言えば当然かな？」

パスワードを入力し、データをモニターに映し出す。

コア部は空いているが、理論上は『IS』。宇宙空間を想定しているため完全なフル装甲だが、白騎士と同じくフルフェイスだ。

「これは…フムフム。これが…こうであだから…うん！あるるん、東さんはびっくりだ」

「気にしてもらえてうれしいよ。そこで次のお願いだ…」

『織斑千冬』を此処に呼んで

もらえるかな？」

4th・Missing Hacker(後書き)

なんとなく、一夏と箒を投入してみた。

次回は嫁の登場ですww

5th・First Mission (前書き)

べ、別にEXVSにはまっただんじやないんだからね!!

5th・First Mission

ども、主人公なのに本名があまり知られていない主人公のエルレインです。

ついに…ついに俺は愛しのちふゆんに会えるんだ！

そう考えると興奮するのが普通…。

だが興奮しすぎて冷静なのが現状である。

というわけで俺は、ファーストコンタクトで良い印象を与えるための挨拶を考案中だ。

今、現時点での挨拶はこうだ。

『織斑千冬さん。初めまして、私、エルレイン＝アルヴァルスといます。以後、お見知り置きを…』

シンプルだが、がっつかないノーマルでジェントルな挨拶。

そう、俺はクールでジェントルな王子様タイプな男を演じるつもりだ。

うん、これで将来安定だな。と思った時、束が千冬に連絡する声が聞こえた。

「ちーちゃん、ちーちゃん！大変だよ！まずいよ！緊急事態だよ

！今すぐ来てくれないと…」

あれ？これっていわゆる『フラグ』ってやつじゃ…（・ω・）？

その連絡から約7分後、ラボの扉が勢いよく開かれた。

その音と同時に、俺は腰をあげ来入者のもとへ向かう。

さあ、行こうか。これが俺のファーストミッションだ！！

「誰だお前は？」

「お…」

「お？」

「おおおおお前を俺の嫁にしてあげよう。これは決定事項だ、拒否権はない！！」

…終わった。

完璧にやってしまった。

しかも、某黒ウサギが言うセリフを…

冷静だった俺は何処へいった…

これでは俺はただの変態ではないか…

もう燃え尽きたよ…さらば日ほん「束、あの隅で灰になっている男は誰だ？」…ん？」

「ちーちゃん！痛いよ頭が割れるよ！でも分かってるんだよ！それがちーちゃんの照れ隠しだっ…イタイイタイイタイ…！」

「束、質問に答えろ。」

「…あるんは、あるんだよ！」

束が答えると、織斑千冬（通称、ちふゆん）は俺を呼んだ。

「私名前は織「織斑千冬、俺の名前はエルレイン」アルヴァルス。出身はアメリカ、育ちもアメリカの生粋のアメリカンだ。千冬、君があゝの『白騎士』を駆る姿を見て、俺は君に惚れた。もうクールでジエントルな王子様は諦めるよ…。そのかわりここに宣言しよう！織斑千冬は俺の嫁だとな！！」

ふう…。決まった！

「束、お前が話したのか？」

「あるんは知ってたみたいだったよー」

「そうか…」

あれ？俺の宣言について何か頂けると…

「おい、アルヴァルス。お前は何者だ？」

おうふ…。なんて警戒心丸出しな視線だい！

「気軽にエルと呼んでくれ。何者って？俺はそこにいる『天災』以上のハッキングの『天災』だよ。そして千冬は俺の嫁。」

「ちーちゃん、あるんがこの束さんを超えるハッカーなのは本当だよ？どっかの国を蹴散らしている時に束さんごと『侵入』され

ちゃった…。あれ？ちよつと今の卑猥…イタイイタイイタイ！頭が
われちゃうよ！！」

束が実際の出来事で俺の言葉の信憑性を上げた。

そして束のおかげ？で俺は『不審者及び変態』から『天災な変態』
にランクアップした。

だが、いいかげん少しは触れてほしい。

故に今一度ここに宣言しよう！

「織斑千冬は、俺のよべっ…やべ噛んじゃった。てへぺろ（・ω
<）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2477x/>

IS～ブリュンヒルデ攻略戦～

2011年12月17日02時55分発行